

世同其和也

[illegible]

芳林苑

西南
組

步記

我々も通ふ後新和を存す

车如

世如石令

南
入

平江分署

里次豐永

金氏

三
其為至矣

寺門之序

西紀入

右馬太記部心道
 依る月日印定下
 少くはあわらう

甲午

南紀
 西

舍得亮
 送夏帝
 石川公家
 系也
 川崎長

萬年

山石
苔

云々

政石

吳振龍
五十六

五部より武芸川迄一歩成身紙金去存年
 分去月十方其後名仁不、要公其方、相違
 之候に仰及、金令と相違、是れ相違、
 候に、今不、要公、去來、其方、相違、
 あり、其方、相違、其方、相違、



此系女探
此係孤交

馬谷所収可目
此係十一年

常列
此係

此係村百姓

此係

此係

此係

此係

日新大工町
 石井屋
 高橋屋
 口部
 水戸屋
 石井屋
 石井屋
 石井屋

少之者其尋事者之旨町村及人
 信其出社之上新所之運子出之
 可也之方也

已
 胃之好所
 床女

出若
 如

而若之也大附與織之及水北年女様

五

蘇子

五虎所必自

終

拾

以法一札之來

今夜

水野

衣女

海

南

町

太七

中

升

ヲ

尋

年

一

月

日

辰

出

海

方

が

と

お

ん

妙

知

世

子

七

符

名

子

水戸市
水戸市

水戸市
水戸市

水戸市

水戸市

水戸市

水戸市

水戸市

水戸市

水戸市

其能研常也。おのり多所を始て其
 堂より大財を破り及水程事也。す
 覺て新於月代也。と以て海多如指也
 指虎也。世にる指也。と名を又と名
 して多し。乃ち石とて。子と名。拂と名。月
 始末とて。付下光陽也。と名。と名。前
 書とて。乃ち海也。と名。と名。元也。と名。

乃移其石於此
 此石乃移其石
 於此

乃移其石

乃移其石

乃移其石

四月廿九日 止降出用

一北口郡内石川、少多、就未、新、入、台、分、以、後、
目、目、之、打、告、者、人、其、死、不、持、也、

一、乃、乃、一、此、定、下、金、少、者、以、持、戸、口、上、者、分、持、也、
也、

一、此、徒、同、何、事、金、少、者、所、在、持、也、金、之、及、其、民、來、地、而、者、
手、形、也、此、定、不、分、乃、以、金、下、分、持、也、持、也、

半、為、利、向、泉、所、互、留、屋、本、來、以、所、和、泉、所、持、也、

事者去ん十有口紋研る事は精在る事は
 以て其者今や入る事なり其者今や入る事
 其者今や入る事なり其者今や入る事
 通に其者今や入る事なり其者今や入る事
 事なり其者今や入る事なり其者今や入る事
 事なり其者今や入る事なり其者今や入る事

事なり其者

西に

山に

事なり其者今や入る事なり其者今や入る事
 事なり其者今や入る事なり其者今や入る事

けり事なげに末夕に味不ま帰るる者哉
 する事しは候乃と云ふ

廿七

少祖

西祖

けりれと云ふ事と云ふ候へは候へは候へは
 ことと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 此と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 元と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 けりれと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

よりたふし金に下りし十兩を金に換へて

より

金に換へて

金に換へて

金に換へて

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

金

大い通

平太夫
おふ

さういふに所ふ所目録を要告りしもの情愛
おふ——おふおふ——おふおふ——おふおふ——
おふおふおふおふおふおふおふおふおふおふ
おふおふおふおふおふおふおふおふおふおふ

おふおふ

おふおふ

西の部

下古指及種の跡を以てしるす事通ふ如く松節の以て通ふこと多し
 以て市供辨りたるは此の如く之を以て通ふ事多し松節の以て通ふ事
 多し此の如く之を以て通ふ事多し

市 中 御 用 留

一 市 中 御 用 留 之 事 多し 此の如く之を以て通ふ事多し
 之 市 中 御 用 留 之 事 多し 此の如く之を以て通ふ事多し

一 市 中 御 用 留 之 事 多し 此の如く之を以て通ふ事多し
 一 市 中 御 用 留 之 事 多し 此の如く之を以て通ふ事多し

一 枕をとりて石を枕にす。月を人に見、指をさす。
 一 玉より金地をさす形。赤く石をさす。赤く石をさす。赤く石をさす。
 一 四や郎左より、指をさす。指をさす。指をさす。指をさす。
 一 赤く石をさす。赤く石をさす。赤く石をさす。赤く石をさす。

七月 言 口 伴 口 司

一 七月 言 口 伴 口 司。宝珠をさす。宝珠をさす。宝珠をさす。宝珠をさす。

一 宝珠をさす。宝珠をさす。宝珠をさす。宝珠をさす。宝珠をさす。

わー十万の偉司

一、市井の繁栄を云ふより、お柳の以て、市井の繁栄を云ふより、
 一、市井の繁栄を云ふより、お柳の以て、市井の繁栄を云ふより、

一、市井の繁栄を云ふより、お柳の以て、市井の繁栄を云ふより、
 一、市井の繁栄を云ふより、お柳の以て、市井の繁栄を云ふより、

上下所伝、お柳の以て、市井の繁栄を云ふより、
 一、市井の繁栄を云ふより、お柳の以て、市井の繁栄を云ふより、
 一、市井の繁栄を云ふより、お柳の以て、市井の繁栄を云ふより、

盗取此之代而受之通還
 其方中人主之

有りナリ

生駒義典

今年新年
 海老島島

上澤新おお三郎祐藏
 十條お姉舞舞
 古所蔵
 此の蔵

大井川

一去年二月十日 大井川 川崎 石巻 寺下 石巻
 の古湫を掘り出せば 古井 石巻 寺下 石巻
 一古井 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻
 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻

寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻

大井川 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻
 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻
 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻
 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻 寺下 石巻

此乃作本要領之教
加太甚也然

五月十九日 以陳菊

一平中書法場之收長年家元抄也

四百五十五

[illegible]

一、此戶之舊才口心古東應今木可名松代、其若手形只孩子身、
此所費任亦長在也、支配小抄出、也。

之紀下事毛羽の少令介三介目底信此事昨改
 以中らりしう去辰有中日示以介目底信
 あ川主やた今らりしもの妻以若を思ひ
 其方ふれおと監かし麻路色へ三退入所
 多しとらふ紀抄か——新橋より探入麻路部
 賀おと中底無改改中一役日お仕人日新至交
 之夜ふた去来外未ふあふとわれ宛神立退
 吊り以ふ紀下中使お原帝ちやちの中名交
 史分麻路色へ三退入所其方原帝をも

大元江男裕三子如裕三子牧三子雙入公
 永江大監正七郎上末平三子江打江
 新出江江江江江江江江江江江江江江
 不江江江江江江江江江江江江江江江
 監正七郎上末平三子江打江
 永江大監正七郎上末平三子江打江
 不江江江江江江江江江江江江江江江
 監正七郎上末平三子江打江
 永江大監正七郎上末平三子江打江

市に於て造るるもの多し其の多しを記す

市に於て造るるもの多しを記す

一 去辰年市に於て造るるもの多しを記す

市に於て造るるもの多しを記す

一 市に於て造るるもの多しを記す

一 市に於て造るるもの多しを記す

市に於て造るるもの多しを記す

一 市に於て造るるもの多しを記す

一 市に於て造るるもの多しを記す

内組金成書比令一交り今通口集年序
 外組之様上未達各商一様電ト云定以反産
 振一交り以反以云云

ナリ一不云

海中也云云

今月新中振

云一木云云此振菊

一杉山は飛上着路を初振初一依以振手月分振促云
 如右電云一依是云云一依以振振手月分上云云
 一以戸口振手月分上事振手月分上何云振手月分上事振手月分上事

法水子取口跡定事あり
 一 寺蓋寺中戸戸無路以因我
 名是し以多相事あり
 戸中中

口廿方 口御用

一 煙爰中入月持屋中
 一 市中戸中入月
 一 素雲外社也社

上河内村素戔神社例年六月廿五日祭に最
 古より、年終に本社を奉り去年中ハ上河内寺殿
 へ

中細言様は年中故より本社抄写し、
 各年の最期にあり、本年何れも本社可なり
 化^十口^五村^五市川^五五^五村^五何れも去年中ハ保
 持ふ本社抄写し、本年何れも本社可なり
 一社概及り、各年何れも本社可なり
 以上各年何れも本社可なり

上今年おすれは、
 交世眼乃は我人

ありー未たり

寺新多

西の節多

上河村孝義、非社所年、
 手書、お社交来、去年中、
 打目お社拾取、お社所年、
 是、何と、お社下、
 出紙上、お社所、

ちれり

六月三日 日陰月

一 修和史も言平免云之菊上經所へお三々伏見月、
み捨ある

一 折本公多う高云り中江戸大月用二々正不違第
所者後所、身手形以能方、み捨ある
一 五りりらりり月へ、み捨ある

以件今升改年日

一令三抄力

一令抄七及

右之者其近年所及抄毫以上者多し其の特北二處
 之字家業より而法に事ある者多し其の字を經て
 抄文に於て其の字を引定化係し今年限
 其の字を引定し其の字を引定し其の字を引定し
 其の字を引定し其の字を引定し其の字を引定し

其の字を引定し其の字を引定し其の字を引定し

鼻
 其の字を引定し其の字を引定し其の字を引定し

其の字を引定し其の字を引定し其の字を引定し

和少院所居處より早稲京に爲る上り只新木並
 居多し然れども少く並に斷りし所無難に其分
 由事と云ふに代其より新木より役人此の也
 本居り得れ礎と云ふ分此上り石敷板改分等
 へ此先より本より此の井三より本末道より本
 へ今より交り方より井三より本末道より本
 向所より此の古橋入用より此の古橋入用
 通より此の古橋入用より此の古橋入用

有りし所

今利取手

五十七年十二月三十一日

之少操筆人 松

以之年
元恒子永人

黒次三斗

右之若王保八百年持之石有諸大餅石を
子近ニヤ年アニヤ以之てふ山て延川 あり
子近木ぬく松の遊る交けあるは我々を
子り 七

西之部一戸

以之年

上今本既出方妻 監城引今之休之出也
 妻女之呼也 事如妻 以之休之出也
 乃指也 知下 之局 方 戸 後 有 一 乃 安 之
 呼也 之 休 之 事 之 乃 安 之 乃 安 之
 十 天 指 原 今 十 八 分 之 安 之 乃 安 之 乃 安 之
 乃 安 之 乃 安 之 乃 安 之 乃 安 之

ありし

今升新

目より

此係主經新天受

凡此以書附於終止

一見及後之依終止去之書中一以所以上作之書村
 寬端如來去秋中分燒書後世代如真如所灰之介
 村益令至今年令招書如以抄或果或定至之為在
 沖年之依之不費弘以依之至之代所愛之見以
 之遠存之介費之果放氣以下之村益亦亦來下
 平伯割今之介也止從之拍之介為以招之為之
 年分也燒書之寬端之應之村益抄書之交之利之
 方之止之及金之介也約定之金之書之減之拍之

今之世也、
 左、
 比、
 尚、

此等記下上重介大也事也今にト去る月々
 此等記下上重介大也事也今にト去る月々
 代大七組改修長松原史進より松原史進
 中にも去る月々今にト去る月々
 身元出ても今にト去る月々
 主と姑末と増より多事成り今にト去る月々
 今にト去る月々今にト去る月々
 新出別出辨今にト去る月々
 去る月々今にト去る月々

不承也

ありふらふ

中村素子

今井新平

去る所上金介大七妻也ふりて氣多し
 少日義成氏女也年女ふ呼ぶし不承る代
 太也、此改源氏松原の指也し衆者公
 手以ふ五名又ふらふり、景元又、
 初、新、始、株、子、坊、子、右、代、金、元、上、ヶ、上、為、村

戸役より在下役者より上へ新ありて
 神八町人より月合より六八の長き迄は
 之右に任付 至多ありて 万石村より
 打方より七丁村 一丁村 以迄ありて
 之より九丁

中村より上へ

今井村より

上河内村 嘉慶元年 社為月 市中 社より
 万石より 八丁 九丁 一丁 二丁 三丁

手帳に記入する所は、
 手帳に記入する所は、

手帳に記入する所は、

手帳に記入する所は、

手帳に記入する所は、

手帳に記入する所は、
 手帳に記入する所は、
 手帳に記入する所は、

手帳に記入する所は、
 手帳に記入する所は、
 手帳に記入する所は、

方

今并新平

方は同いふ

上河内村妻重郎社金介如社名口所不踊
是抄金十文与新金口所麻
天正社名口所木如張名刻上金介如所目是
金平一

上河内村妻重郎社金介如社名口所不踊
口所金口所木如張名刻上金介如所目是

[illegible]

古より天下を治るは自、明徳入るに由りて
其の心交ひの約也。孟子云く、道者中
新と云ふは、漢四帝の中、仁義ハ行はれ及ぶ迄、大吏
多し一統王が傷みたりと云ふことあり。是なり。余
は来りて此の政を治るべし。夫れ儒の教の如き也。

人々を新玉に招く事ハ誠業に招く事也
 是れをわづらひてなりけり未だ盛衰中なるを
 農石にあやかしき身なりけり今ふと招く事ハ
 子若しとてけり悔れし事ハ此なりお返しに
 ちりしるふ外に三過を満はてしけり古き過は
 たりし

之りけり

今世新玉

子若しとてけり悔れし事ハ此なりお返しに
 ちりしるふ外に三過を満はてしけり古き過は
 たりし

手入少くは、持至るより、交、少、并、目、上、等、目、
 万、有、例、度、少、路、降、本、云、昌、石、交、地、根、際、成、台
 梁、也、三、石、少、石、尾、上、之、新、外、本、持、至、度、台
 何、中、本、何、相、示、中、之、云、之、而、之、少、目、之、地、之、端
 本、本、建、至、之、余、け、之、地、之、之、火、取、本、之、持
 之、下、之、持、至、度、成、何、之、之、何、之、通、本、解、之、交
 以、候、之、何、之、上

之、之、之、之、

之、之、之、之、

之、之、之、之、之、之、之、之、之、之、

一 今も
いふに
おかし

その西の口へ明へるも
おかし

口
今も
おかし

一 今も
いふに
おかし

その右の口へ明へるも
おかし

今も
おかし

一 今も
いふに
おかし

今も
おかし

その一の口へ明へるも
おかし

今も
おかし

今も
おかし

今も
おかし

以善終向
延年也子
亦砂乳如
多自乃之
志字樣

是年下人
王日字無
也拘於兩
兼之故有
其

とて通
其長金之
交は皆中
心

常

乙卯新刊

五ノ目、人、衣、指、
本、文、字、中、以、善、法、極、木、根、刀、之、終、是、正、也、通、以、善、法、力、大、立、大、之、所、お、ね、く、衆、其、名、爲、と、り
て、り、に、は、

卷之六

吳昌碩

中書省

不食化可泉所
所月五
所常通
秋水

梅の里より水邊せり柳並柳乃以て無花の里
 川の前より舟由敷波の里より舟由敷波の里
 川の前より舟由敷波の里より舟由敷波の里
 川の前より舟由敷波の里より舟由敷波の里

二月

乙未年

覚

松角柳

乙未年

乙未年

乙未年

早もそねおろす一ふふあそび海に流す
 水に酒をいれおろす一ふふあそび海に流す
 乃ち中へいれおろす一ふふあそび海に流す
 乱るもいれおろす一ふふあそび海に流す
 東に下りていれおろす一ふふあそび海に流す
 振るもいれおろす一ふふあそび海に流す
 河原に下りていれおろす一ふふあそび海に流す
 斗に下りていれおろす一ふふあそび海に流す
 万葉に下りていれおろす一ふふあそび海に流す

如市所引連も折る耳 なる東水洞なる代り
 本洞水洞とて是等なる魚を金とて一
 前より引るも白く細く釣りけりの皆捕
 りて一之代、之より之を水洞に揚ぎ世
 大抵は長きとて少くは短きとて却るる
 用ニかゝるもの少くは多し大抵は少く
 少くは多しとて一之代、之より之を水
 洞に揚ぎ世に揚ぎ世に揚ぎ世に揚ぎ
 世に揚ぎ世に揚ぎ世に揚ぎ世に揚ぎ
 世に揚ぎ世に揚ぎ世に揚ぎ世に揚ぎ

何れ久しき様子丹とて水は流す世は流るる
 年月

今井新市

心算の如き事と云ふは水は流るる世は流るる
 何れ久しき様子丹とて水は流す世は流るる
 年月

古事のそ段 御事と申すおれおれおれ
 城より来るおれおれおれおれ
 知れぬ事と申すおれおれおれ
 以ておれおれおれおれ

己せりおれ

下等
 油
 油

少部所教所事也 水折注通る言
 記述も申すおれおれおれ
 守角三折おれおれおれ
 将より来るおれおれおれ

道中
即此乃示

漸次抽所至因

西坡作書
重刻

長年
持世

張師

海山先生

知海之廣而不知其深

榮國

鄭之公傳

乙巳

利在萬

子と云ふ毎交りて来り抱りて居りて云ふ
 為に云ふ法流りて云ふ云ふ云ふ云ふ
 何と云ふ

子と云ふ

子と云ふ

子と云ふ

二月
 一、概て買取之
 二、少の買取之
 三、所

取之己と見成帳を掲げ之とて買取之
 中、少の買取之
 一、概て買取之
 二、少の買取之
 三、所

概て買取之
 少の買取之
 所

一^青ニ^カ〜

四^カ〜
五^カ〜

上^カ所
下^カ所

一^青ハ^カ〜

四^カ〜
五^カ〜

上^カ所
下^カ所

一^青ニ^カ〜

四^カ〜
五^カ〜

上^カ所
下^カ所

ち〜色あそびたけなす

はなよりけし

是

ち〜色あそびたけなす

ち〜色あそびたけなす

細石

ち〜色あそびたけなす

ち〜色あそびたけなす

本家

ち〜色あそびたけなす

ち〜色あそびたけなす

ち〜色あそびたけなす

ち〜色あそびたけなす

ち〜色あそびたけなす

行幸の次後より若祥院より市經院御
 所へ移りて也又他より居るに至る可
 也
 考りし方其年未だ其成る

足

智苑三振

山以振
 三振
 上振

五尺四寸五分所字を幾に振て自ら多に大角に
 角り方不足多に南より北に振て多に振る

以之記下下年所也妻之山子老長之文
 与中老引合監城改改水此来女より嘆
 之知知より代五太七与一老而改改所
 与十より持原足近あり之也五白電元死
 おとるより平形より下足局利より後
 以り我下交与新お利お局より亦之受
 元費是持下中なる委おし之者より
 十念に来おるより承之より亦之
 以り止り
 中長丈より

多利物平松

心去のり中

細石

石

石

石

石

存之者此去のり月中
石路内区改様分以の
石路内区改様分以の

引合之者一曰此峰おとと事一柳中麻口之信
 之右之信之者川中紅子様之中之之者
 口之方別城之快之度之者之者之者
 下之者之者之者之者之者之者之者
 之者之者之者之者之者之者之者
 今之者之者之者之者之者之者之者
 之者之者之者之者之者之者之者
 之者之者之者之者之者之者之者

此より以後は紙より紙に
指し合はせ

とあり新

五ノ通十ノ方加刺仕り上り品以上

少林氏年

京都下書院様

引張り下し紙

此より下は紙

一芝金板素より目傳上り店中より師方より渡人

[illegible]

有長き方圓外より少海島に常河の中松
 下流ありて此處に松林ありて中より
 之を流す此の山脈は松林ありて中より
 之を流す此の山脈は松林ありて中より
 之を流す此の山脈は松林ありて中より
 之を流す此の山脈は松林ありて中より
 之を流す此の山脈は松林ありて中より
 之を流す此の山脈は松林ありて中より
 之を流す此の山脈は松林ありて中より

三合抄書之所用

三合抄書之所用

三合抄書之所用

三合抄書之所用

三合抄書之所用

弘治己亥三月

陽草草親院口前

草

草

陽草

草

利

草

草

利

草

利

八所

草

草

草

八

草

草

萬石所
其月

乃乃乃
一石

乃乃

乃乃

乃乃
乃乃
乃乃

海川
乃乃乃乃

乃乃乃

乃乃乃乃乃

乃乃

乃乃乃

乃乃乃

乃乃乃

あき

浪之助 浪之助 浪之助

浪之助

浪之助

〃

浪之助

浪之助 浪之助 浪之助

浪之助

浪之助

浪之助

浪之助 浪之助 浪之助

浪之助

浪之助

浪之助

浪之助

浪之助

御用留

水戸殿所

水戸殿所

水戸殿所

水戸殿所

水戸殿所

水戸殿所

水戸殿所

水戸殿所

水戸殿所

水戸殿所

水戸殿所

水戸殿所

[illegible]

張之

弘治乙亥

太溪改過

公迎脚許お痛
新なりと方お調
お病並云云
お病よりお痛
云云

己未

御歌集

以爲所
改書

江之書

泉所

張子

七月十一

市

卅二

乃思古之志也

一令之故也

貸重箱

太田所多良所村介より
五月辰
辰野里求と云ふ金子彌生と通ふ所ありと云ふ
松より日と云ふ所へ移り満持寺と云ふ所より
法華寺よりと云ふ所へ移り満持寺と云ふ所より

要あり事ぬれたるなり

今井新平親

名物新書

心善行自中

長月屋
重三郎

ちのの月夜を夢所たありとて
 ねえねえとてねえとてねえとて
 大いなる夢をねえとてねえとて
 ちのの月夜を夢所たありとて